

子育ていろは

トウラが幼少の頃（昭和二十年前後）、むぎ・粟・豆などの穀類はパントウドウツクイ（口径十五cmほどの素焼き瓶）に入れて保存していた。母はその穀類の中にサタミギー（おにぎり状の黒砂糖）を入れて保管していた。黒砂糖は毒消しなどの薬用だった。トウラはこつそりそれをとって食べようとした。ところが硬くて歯が立たずに、元に戻した。砂糖は周りの穀物に水分を吸い取られて硬くなっていたのである。後日、母はトウラが悪さをしたのを察知したようであったが、強い叱りはなかった。被害がなかったからであらう。祖母や母は、何かあったときのためのシュテールといって、ある量を取っておくのが常だった。

その当時の夕食は、石油カンテラ一つの灯りの下で、十人前後の家族が肩を寄せ合い、芋ざるを囲んでのものだった。祖父母も元氣だった。兄弟は八人いる。当時蘇鉄のなりがゆを食べていたと私が言うところ「嘘だろう」という人があるが、本当である。父は教員だったが、終

戦直後の給料は米二升ほどのものだった。無給のときさえあった。田畑をたくさん持つてゐる人が、米も作り、豊かだった。うらやましかつた。ひもじい思いもした。贅沢な食事をしてゐる今時、罰が当たらないものだろうかと思ふ。トウラが中学生のときの家庭調査表に、田や畑の面積を記入する欄があつた。面積の大きさⅡ裕福度で、トウラの家は少なくて恥ずかしい思いをした。

平成十九年正月早々、家族間の殺人死体バラバラ遺棄事件が二件報道された。一件目は、歯科医師を指す三浪中の次男が、妹（二十才短大生）を殺害し、遺体を関節ごと十五カ所に切断した。両親と長男が歯科医師のエリート裕福家庭である。一件目は、結婚五年目の妻が、仲のこじれた夫を殺害して頭、胴体、下半身をばらし、袋に入れて人目につく別々の場所に遺棄した。夫は外資系の一流会社員、加害者の妻も才媛で会社員である。

一体全体、何が不服でこのような凶悪殺人をするのだろうか。しかも家族をである。トウラには全く分からない。あるテレビ番組の中で、平成十七年の一年間で起きた殺人事件は千四百件で、そのうちの四十

五割は家族間、知人友人まで含めると八十七割だったと。また妻が夫を殺したのは百二十件あったとか。

親が子を殺し、子が親を殺す。兄が妹を殺し、妻が夫を殺しバラバラにして捨てる。小・中学生がいじめを受けて自殺し、校長先生が自殺する。世界中で最も安全安心とうたわれていた日本の国は、いったいどうなったんでしょうか。

人が生まれて、死んでいく家庭。人が出ていき、帰ってくる家庭。夫婦、親子、兄弟、家族が寝食を共にする家庭。そこで今まで聞いたこともない地獄が展開されている。

芋を分け合って食べ、ひもじい思いをしていた時代より、贅沢三昧の今が不幸とはどういうことでしょうか。この因は何だったんでしょうか。因果応報を説かれたお釈迦様・仏様、これの因はなんでしょうか。それをご教示いただければ、取り除きまっとうな元の大和の国にしていきとうございます。

I Tの時代に古いと笑われそうだが、習った子育ていろはです。

子育ていろは

い、いつも笑顔で一家団欒

ろ、炉辺談話の主役は子ども

は、話は互いによく聞いて

に、憎まれっ子ほどよく伸びる

ほ、褒め言葉が子どもを育てる

へ、隔てを作るな上と下

と、どの子にもあるよいところ

ち、知育の前にまず愛育

り、理屈を言うよりやって見せ

ぬ、糠に釘と思わず、教え繰り返し

る、留守番も大事な一つのお勉強

わ、わがままは親の心の弱さから

か、考える子どもと共に伸びる親

よ、よく聞いて、それから静かに説いていく

た、助け合い励まし合うのは親兄弟

れ、冷静に自分の態度を振り返る
そ、側にいるだけで落ち着く子の心
つ、使い方、工夫をさせておこずかい
ね、寝ていて子を起こすな
な、泣いている子を温かく見守って
ら、楽ばかりさせれば子どもを弱くする
む、むし返す小言は少しも効きめなし
う、後ろ姿を子どもは見ている
の、のびのびとした子は仲良き夫婦から
お、親の座崩れて子はぐれる
く、工夫して生み出す親と子の時間
や、約束を破る親には、子が背く
ま、回り道する子をじつと待ってやり
け、喧嘩しながら子は育つ
ふ、双葉の中にある個性
こ、声を掛けよう隣の子にも

え、栄養が過ぎて苦しむ肥満体

て、できることから励まして

あ、挨拶は家庭の躰の第一歩

さ、最後までやり抜く姿勢を育てよう

き、厳しく教え温かく育てる

ゆ、譲り合う心の芽生えは家庭から

め、目が語る千万言の親の愛

み、認めれば一人ひとりが生きてくる

し、叱られてばかりいる子は育たない

ひ、非行児は家庭に対する不信から

も、もしもと電話のかけ方躰の一つ

せ、整理整頓幼児から

す、するな子の前夫婦喧嘩

植 福

「水を飲むときは、井戸を掘った人の恩を思え」

往昔、ツルハシ、ティガラ（かなてこ）、石のみ、セットー、ハンマ
ーなどで井戸を掘った。命の井戸と重用されていたが、今はかえりみ
られず放置され、シチャパガや雑木が口をふさいでいる。ある学校の
井戸が無用になった。そのままにしておくのは危険である。どうしよ
うかとみんな首をひねっているときに、ある人が埋めたらいいと言う
人がいた。それならあなたがスコップ一杯の土を最初に井戸に入れて
くれ、その後はみんな埋めるからと、もう一人が言った。固唾を呑
んで返事を待った。「いやだ」だった。「猫の首に鈴だ」と誰かが言っ
て、大の大人たち大笑いした。埋めないのは水神様信仰があるからで
ある。蛇口ひねればじゃぶじゃぶの今の時代、冒頭の諺は、辞典の中
にとどまるだけになりつつある。

「ハッピーバースデーをするときは、母の産みの苦しみを思え」

これは、ドウダンミン作で、これからの諺にしてもらいたいものである。バースデーケーキに年の数だけろうそくを立て、点火して歌を歌いケーキよく吹き消す。この誕生パーティーが年々盛んになっていくが、ケーキよくさわぐ前に「お母様に感謝を捧げる時間」を取り、「お母様、苦しみ耐えて産んでくださって有り難うございます。お陰様で、今日〇〇歳の誕生日を迎えることができました。ご恩を忘れることなく、自重自愛して生きていくことを誓い、ここに誕生感謝祭をにぎにぎしく始めさせていただきます」と宣誓したらいかがだろうか。そこに母親がいればなおさらいいが、いなくてもその一言はあつてもいいではないか。今時医療福祉が充実して昔ほどの難儀・不安がなくなつたとはいえ、母の一大難事業であることには変わりはない。ちよつとした心遣いでもう一つ意義深いパーティーになる。

「花見をするときは、桜を植えた人の恩を思え」。

ピヤーヌパンタの沿道に桜が植えられている。名護の桜が、早咲日本一なので、テレビが毎年のように報道している。その後桜前線が北

上していく状況が、氣象情報の中で報じられている。花見を楽しんでいる人は、植えた人への思いをいたしているだろうか。

「植福」とは、後世のために備えておくことである。山に木を植える、この木が将来良材として役立つ。植えた人は何らの恩恵にあずかることがなくても備えておく。後世の人々に感謝されるような「もの」なり「こと」をするのが植福である。

あの世の入り口には、閻魔大王様が仁王立ちにされていて、その人がこの世でしたよいことと悪いことを調べ、よいことの方が多い人は極楽に行かせるそうであるが、その調査項目の中に、この「植福」も入っているだろうか。ドウダンミン男がきいてみたところが、「極楽に往きたいためにやる植福は、本当の植福とは言わない、そんな邪心では駄目だ」といわれた。

ややあって、「だけど、やらないよりはマシだから努めてやりなさい。続けているうちに邪心もなくなる」、と。

「もう一つ、大切なことは、植福者を忘れるでないぞ」、と。

平成十九年二月記

島流し

佐渡島は、日本最大の離島である。金鉱山で、「佐渡へ佐渡へと草木もなびく」と歌われた島である。島流しの島でもあり、京から順徳天皇や日蓮が流された島である。能の大成者・世阿弥もここに島流しされた。能が盛んな島で、現在でも島の人々によつて能が演じられ、能が生活に浸透している。これは世阿弥が島流しされてきたお蔭だと想像される。

西郷隆盛は、龍郷に島流しされた。そこで村の有力者に勧められて島トウジ（島妻）、愛力ナをめとり、男子と女子を生んだ。男の名は菊次郎で、後に京都市長になった。西郷隆盛は明治維新の立役者であつたために、彼が住んでいた龍郷の家屋敷は、観光スポットになつてゐる。再度、隆盛は徳之島、沖永良部島に島流しされた。

薩摩藩から文化三年（一八〇六）から嘉永五年（一八五二）までに大島郡に遠島されたのが、大島一三八九人、喜界四〇〇人、徳之島七十一人、永良部三一五人、与論六人である。薩摩藩本土からは、寛延

三年（一七五〇）の頃から始まり、明治八年通達によつて遠島人制度が廃止になるまでの百二十五年間は、毎年、各島々の人口の大体百分の一の割合で配流されていた。従つてその数は数千人を超えていた。与論の流人が極端に少なかったのは、代官所がなく、監視不行き届きのため配流しなかつたからである。（以上は奄美の風土と人と心、水間忠光著二一五頁から）

島流しは、西郷隆盛の例に見られるように罪惡人とは限らなかつた。遠島人の知識教養において上中下があつた。上は私塾を開き、地域の子どもに読み書きを教えた。永良部にはこうした私塾が二十数カ所あつたそうである。ここで学問尊重が植え付けられた。この恩恵は絶大だと言つても言い過ぎではない。知的財産だけでなく、本土の文化、氣質などがもたらされ、後世にも受け継がれているからである。島にとつて「人財」になつた。下には島民とトラブルを起こす「人罪」もいた。

遠島人の中には島の人と結婚してそのまま居付き、子孫を残し、生涯を終えた者も少なくない。

薩摩藩政下二百五十八年間で、大島四島（喜界、大島、徳之島、永良部）に在勤した代官は約四百五十名、横目、付役を加えた合計は約三千四百名である。代官が滞在している間、身の回りの世話といふことで島トウジがいた。代官は、藩主の名代として絶大な権限が与えられていた。島トウジになるのは、極めて狭き門であった。それは島民による給与があり、髪には銀かんざしを挿すことが出来、家族・一族は優位に遇されたからである（奄美の風土と人と心、二百十三頁）。しかし、いい話ばかりではなく、いやがるのを代官が強引に島トウジにしようとした悲劇物語りもある。

こうした島トウジとの間に出来た子孫は莫大な数になるであろう。その中から明治以降活躍した有名人士は多い。

代官所が与論に置かれなかったために、遠島人を含め「人財」に恵まれなかった。与論と永良部の合併問題があったときに、代官所（役場）がなかったときのこの歴史がドウダンミン男の頭をよぎった。

平成十八年十月記

先輩の加護

昭和二十七年四月、名瀬でトウラは、同級生三人と父と、平木葺きのみすぼらしい家で高校生活を始めた。上級生の中には歯を高くしたさし下駄を履き、肩を聳（そび）やかして歩くバンカラ風がいた。

〇〇高校の喧嘩大将は誰、一番は誰などと噂話を聞かされた。与論のＴ先輩は、町のやくざとも渡り合うと噂されるダントツの剛勇だった。そのため、Ｔ先輩の威光で与論の後輩達は救われている感があつた。

鹿児島市で与論学生会が結成され、会長は池田利徳氏で、ある会館で大会が開かれた。第二代目与論中学校校長の南情秋先生と元校長の坂本久登美先生が来賓で出席された。南先生は、谷山で養鶏場を経営されていた。南先生は、「百獣の王ライオンは、自分の体の中にいる小さな虫を殺せずに倒れるという「獅子身中の虫」の諺を引用されて、自分の心の中にいる「怠け虫」に負けてはならないと訓戒された。奮させられ、感銘深かったことが今も心中（身中）に残っている。

次は「奄美の風土と人と心」の３３９頁からの転記である。

往時、鹿兒島には、大島郡学生後援会があつた。

昭和十年代前半、ある学校でのことである。出征軍人見送りの帰途、満員電車の中で、郡出身の女子学生が、引率の先生に「○○さんはシマ人じゃちねえ」といわれて、穴に入りたいほど恥ずかしい思いをしたと、帰校後、男子学生たちに泣き泣き伝えたのである。義憤を感じた学生たちは、直ちに当事者の教師に陳謝するよう校長を通じて申し入れた。

ところが、いっこうに捗（はかど）らない。そこで、抗議のストを構えた。

これを聞きつけた後援会の方々が、野村政尚県議会議員（与論町出身）を先頭に駆けつけて来られた。

「なんとという馬鹿なことをしでかそうとするのか、君たちの父兄は首を長くして、来年三月の卒業を待っておられるではないか。今このような軽率なことをしたら、元も子もなくなるではないか。後は僕らに任せて、急ぎ帰校して勉強を続けよ」と叱りさとして、退散・帰校させて、事なきを得たという。

その後、後援会の面々は、県庁学務課へ出向き、課長の斡旋（あつせん）で当事者の教師の陳謝となり、双方ともめでたしめでたしの解決となったのである。

在鹿先輩たちの人材育成の熱意と義挙によつて、火急の場を救われた学生たちは、全員卒業し、大島郡内の学校に巣立っていったのである。（以上）

島外にあつてなお、先輩諸氏の加護や善導によつて後輩が育てられているご恩を思う。そして、私たちの後輩や子供たちには、「シマ人」と言われて恥ずかしいと思うようであつてはならない。私はこのシマに生まれた喜びを体いっばいに感じている。

平成十九年一月記

花咲じいじ

桜の花咲く晴れたある日、友から花見宵（よい）への誘いがあった。例年気の合う仲間を呼んで、満開の桜花を見ながらダイヤミをする夕べがもたれているという。時期が来るとその仲間たちは、今日か明日かと心待ちにし、顔あわせると「あの花見は、まだかね？」とささやきあつたりする。待ちきれずに、催促電話までするのが、いるという。当主も、咲き具合と天候を見計らう。

桜の木は、百年を超す大木で、四方に枝を張り、枝は支柱で支えられている。そばには、月見て一杯、花見て一杯できるように土を盛った四角い芝生台がある。

芝生台の上で男たちは車座に座り、じいさんが植えた桜の花を見上げながら、奥様手作りのご馳走に舌鼓を打ち、酌み交わす。宵闇が濃くなつてくるとライトアップする。これがまた美しい。枝いっぱいピンク色の花ムルシは、この世のものとは言えない美しさである。

男たちは、目に入る花の美しさに感激し、口から入るものに上気し、

ウチャガリ スーリーになる。

顔が桜色になった男は、頼まれもしないのに自分から大杯を握り、なみなみと注ぎ、桜花を浮かべて得意満面に飲み干す。

ハシマサルオオムンダイ ワヌチュイシヌマリユミ

ハナシドウシユウテイ ヌマナウキユミ

（こんなにおいしい泡盛酒を、なんで私一人で飲まりようか、

愛し友達寄り合って、飲まずにおかりようか）

と、大杯に酒を盛って廻る。

めぐりくる杯に 桜花浮けて

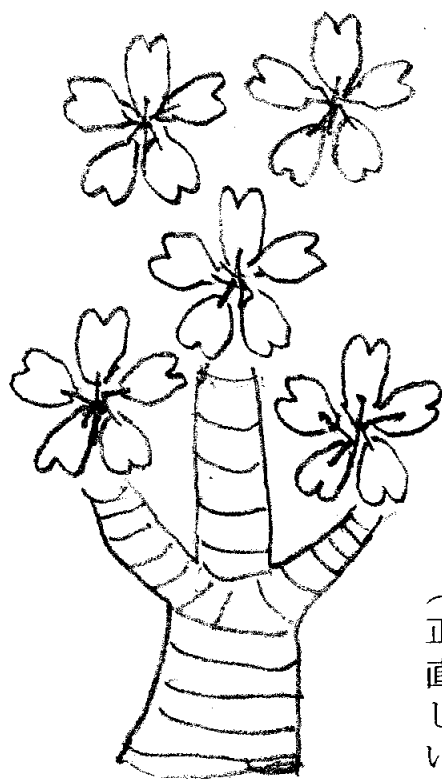
飲めばなおまさる 今日のおくらしや

いつの世にもどこにもウチャガリ男はいるものである。よせばいいのに、「ワヌから一杯」と大杯を持って立ち上がる。

アワリナグリサヨ、ウブガマターヤ、ドウアテイネーナテイ

花見ダイヤミが、鼻ダイになる。

桜は、冬になると葉を全部落とし、裸で冬を越す。まるで枯れ木に



見える。その間、静かに花芽を育み、春先には一斉に花を咲かせる。子どもの頃、正直じいさんと意地悪じいさんの「花咲じいじい」童話があった。「正直じいさんが、枯れ木に灰をまくとぱっと花が咲く」物語りである。これは桜をモデルにしていると思われる。

男たちが花見をした桜は、正直じいさんが植えた桜である。

（正直じいさん、分かる人は分かる）

平成十九年二月記

足の裏

沖繩から「おもしろそうし（琉球古謡歌集）」研究グループ一行が来島した。歓迎の挨拶で、「与論島の島主は今仁城（なきじんじょう）の三男坊である。だから島民の誰一人として沖繩に足を向けて寝る人はいない」と言つて拍手喝采をもらつた。なぜか足を向けるのは失礼に当たるとしている。大勢で雑魚寝をするときに人の頭に足を向けるのは、幼少の頃から躰られたこともあつてトウラの心を苦しめる。

足を伸ばして坐るのは失礼とされ、曲げることの出来ない人はいちいち断っている。私の義父は、軍隊で銃撃を受け、片方の足の膝が曲がらなくなっている。葬式などでも足を伸ばして坐らなければならず、それをかねがね氣に病んでいる。空港問題でもめている席で、「足を伸ばして坐っている」という非難が飛んできた。返す言葉はなかった。隣の人が「あれは事情を知らないからだ」と言ってくれたのが唯一救いだった、と。膝を七重八重に折る表現は畳文化である。膝を折ることで即座に攻撃できない姿勢であり、相手には安心感を与える。

アメリカのライス国務長官（女性）が膝を組んで椅子に座っているのをテレビで見る。椅子文化の西欧ではどうということはないかもしれないが、日本の若い娘に目の前で同じことをされたら、うぶなドウダンミン男はどぎまぎしてしまう。

年を取ると人は足から弱るといふ。それもそのはずである。体重を支え続けてきたのだから。足は大事である。さらにその下にあるのが足の裏である。

尊いのは足の裏である

坂村真民

尊いのは

頭でなく

手でなく

足の裏である

一生人に知られず

一生きたないところと接し

黙々として

その努めを果たしてゆく

足の裏が教えるもの

しんみんよ

足の裏的な仕事をし

足の裏的な人間になれ

足の裏は全体重を支え、踏んづけられ、棘や石に痛められ、きたないものにまみれながら顧みられず、あしざまにされる。人間様よ、お風呂に入るときぐらい足の裏をしみじみ眺め、なでて上げたらいかがでしょうか。〃足の裏よご苦労さんと〃

平成十八年十一月記

お蔭様で

あるお坊さんは、何かあると「ありがとうございます」というのが常だったそうである。あるとき、そのお坊さんが転んで膝をすりむいた、すると膝の周りについている砂を払いながら「ありがとうございます」と言った。そばで聞いていた人が、膝をすりむいて痛い目に合ったのに、何で「ありがとうございます」ですかと聞いた。お坊さんは、「膝をすりむく程度ですんだ、骨を折らずにすんだ、ありがたいことです」と言った。

毎朝、毎晩「南無阿弥陀仏」を唱えて暮らすと極楽浄土へいけると説く宗教がある。蓮如は、「南無阿弥陀仏」を「ありがとうございます、おかげさまで」という意味だとお百姓さんに教えている。

「南無妙法蓮華経」を唱えて暮らすと極楽浄土へいけると説く宗教がある。

私どもの命は、両親の命を受け継いで（お陰で）存在する。遡ると祖父母、先祖のお陰である。さらに遡ると数限りない命のお陰である。

日本民族は、村の鎮守の杜を畏敬し、富士山を拝む。山川草木、森羅万象に天地神仏の「お陰」を思う。「お陰」は、一般的には天地神仏のお陰を意味する。神仏は信じない人でも、人間は天地自然、世間様のお陰で生きている。

つまり、言い換えると、自分以外のもののお陰で生きている。それに対する畏敬の念を込めた感謝の気持ち「おかげさま」である。宇宙の絶対的な神も含めたおかげさまは、「ありがとうございます、サンキュウ」よりも深奥なるものがある。与論の「トオトウガナシ」はこれに似ている。

人を幸せにするキーワードは「おかげさま」である。「おかげさま」を心に常備し、何かあると「おかげさまで」と言える人は幸せな人である。人類一人ひとりが「お陰様」精神でいると世界平和になる。

「おかげさま」を朝晩唱えたと極楽浄土へ往生できる、と説く「おかげさま」教を立ち上げる教祖は出てこないだろうか。

おかげさまで

夏がくると冬がいいという

冬になると夏がいいという

太るとやせたいという

やせると太りたいという

忙しいと閑になりたいという

閑になると忙しい方がいいという

自分に都合のいい人は善い人だとほめ、

自分に都合が悪くなると悪い人だとけなす

借りた傘も雨が上がれば邪魔になる

金を持てば古びた女房が邪魔になる

退職すれば濡れ落ち葉、粗大ゴミとやつかむ

所帯を持てば、親さえ邪魔になる

衣食住は昔に比べりや天国だが、

上を見て不平不満の明けくれ

隣を見て愚痴ばかり

どうして自分を見つめないのか

静かに考えてみるがいい。

一体自分とは何なのか、親のおかげ、

先生のおかげ、世間さまのおかげのかたまりが

自分ではないか、つまらぬ自我妄執をすてて

得手勝手を慎んだら

世の中はきつと明るくなるだろう

おれがおれがを捨てて

おかげさまで、おかげさまでと暮らしたい。

（作者不詳）

お陰様（続）

「おかげさま」は、自分以外に対する畏敬と感謝を込めた言葉であると前回述べた。同じようなことが自分自身の体についてでもいいえるのではないか。

坂村真民は、「尊いのは頭でなく、手でなく、足の裏である」と詩っている。

あなたのお陰

作 竹下 徹

足よ、立っているのはあなたのお陰。

足首よ、スムーズに歩けるのはあなたのお陰。

膝よ、立ったり座ったりできるのはあなたのお陰。

皮膚よ、体の防衛はあなたのお陰。

お尻よ、座って居れるのはあなたのお陰。

ブトウ・ポーよ、小便できるはあなたのお陰。

子孫繁栄あなたのお陰。

肛門よ、糞をたれすつきりするのはあなたのお陰

心臓よ、しばしも休まぬあなたのお陰。

おっぱいよ、赤ちゃん育てられたのはあなたのお陰。

血よ、くまなく配達、収集、病氣治療あなたのお陰。

肺よ、吸ったり吐いたりあなたのお陰。

肝臓・腎臓よ、生きていくのに肝腎な働きあなたのお陰。

胃腸よ、食べ物の消化吸収あなたのお陰。

背骨よ、体も命もあなたの支えのお陰。

骨よ、体を形作るはあなたのお陰。

筋肉よ、体を動かし、好きなことができるのはあなたのお陰。

手よ、とったりあげたりあなたのお陰。

指よ、いろいろな手作業ができるのはあなたのお陰。

首よ、上下左右、顔を動かせるのはあなたのお陰。

喉よ、話も歌もできるのはあなたのお陰。

口よ、ご馳走味わえるのはあなたのお陰。

歯よ、硬いものを噛み砕けるのはあなたのお陰

鼻よ、息も香りも開けっ放しのあなたのお陰。

目よ、美しいものを見ることができるとはあなたのお陰。

耳よ、心地よい声を聞けるのはあなたのお陰。

髪よ、暑さ寒さから頭を守るはあなたのお陰。

頭よ、ドウダンミンでできるのはあなたのお陰。

*生きて居るのはあなたの方のお陰、黙ってもくもく尽くしてくれて
ありがとう。見返りに何にもしてあげられないけれど、死ぬまでお
付き合いよろしくお頼み申し上げます。

平成十九年七月記

笑顔

秋篠宮紀子様が大学生の頃、「スマイル」をモットーにしているという意味のことが雑誌に書かれていた。モナリザの微笑は、世界一美しいと言われる。紀子様の結婚当初の微笑はそれ以上のものだった。与論小学校の正門に「スマイルナンバーワン」の看板を白尾校長が掲げてある。卓見である。朝一番にスマイル。スマイルに挨拶をのせる。子どもの時からスマイルを身につければ身の上の宝となり、品格となる。

麒麟の首はなぜ長いのか。麒麟は、高い木の葉を食べようと一生懸命に首を伸ばした。伸ばす努力をして少し長くなった。その子どもは首の少し長い子が生まれた。その子も伸ばす努力をしてまた少し伸びた。麒麟の祖先は何代にもわたって少しずつ伸ばしていった。そのため下の草も上の高い木の葉も食えることが出来て生き残るのに有利に働いた。その上、首が長いから遠くの虎やライオンを見つけることが出来て身を守るのにもよい。

豚も麒麟も人も同じほ乳類なので、首の骨はいずれも七本である。生物の器官は、よく使うと発達し、使わないと退化していく。ラマルクは、これによって動物は進化してきたと「用不用説」を唱えた。野球のピッチャーのきき指は反対の指より長く、テニス選手の左右の手の長さが違うとも聞いた。トウラは右利きで右手が左より大きくて強い。ボディービルをする人の筋肉は見事なものである。

顔面の筋肉には、笑うとき、怒るとき、悲しいときなどに使う筋肉がそれぞれある。よく笑う人は笑うときの筋肉が発達し、豊かになる。笑わない人は、笑う筋肉が退化して、いざ笑おうと思っても笑えなくなる。難しい顔を続けた結果が仏頂面となる。怒ってばかりいるとその筋肉が発達して固まり、鬼瓦顔になる。

自分の顔を実際に見た人はいない。ただ鏡に写った顔を見ただけである。人に出合ったとき、相手の顔は見ているが、自分の顔は相手が見ている。自分の顔は自分のものだが人のためにある。自分が見るためにあるのではなく、相手に見てもらうためにある。相手に対する喜怒哀楽を表す顔。その時々で変わる顔。一生ついてまわる顔。人生を

刻み込んだ看板。笑顔筋肉を鍛錬して、美しい笑顔を見せてあげたい。

花には水を、人には笑顔を掛けてあげたい。

与論ラツパ節の一節に「泣いて暮らすも五十年、笑うて暮らすも五十年、泣いて暮らすも笑うのも、心一つの浮き世です、憂き世です」というのがある。

一笑一若

一怒一老

笑う門には福来たる・・・笑門来福

笑う顔には福来たる・・・笑顔来福

スマイルあげれば福が来る。賛同いただけますでしょうか。

平成十八年十月記

敬老長寿

平成十八年九月十八日、敬老の日にちなみ、百歳以上の発表があった。なんと鹿児島県一の長寿者は、男女とも与論で、野沢マゴ（一一歳）さんと嶺島峰永（一〇八歳）さんだった。まことにめでたい。

日本一は、女性の一三歳で、男性では一一〇歳である。与論のお二人は、日本一になる可能性だつて十分にある。日本一になったら、名誉町民に推戴し、みんなでお祝いしたい。

峰永氏は、戦前戦中茶花小学校の使丁をしていて、先生が欠勤すると代わつて勉強を教えたりするなど、学校教育万般に渡り時間と骨身を惜しまぬ尽力と功績の偉大さは、誰知らぬ者なく崇敬の念を抱かれています。農業技術も優れ、度々表彰を受けるなど篤農家でもあった。

勤勉実直、その生き方は名誉町民にも値するとドウダンミン男は思う。

九月一日現在の百歳以上の人数は、日本全国では二万八千三百九十五人で、男性は四千百五十人、女性は二万四千二百四十五人。女性が

全体の八十五、四割を占める。人口十万人あたりの全国平均は二十二
人。鹿児島県は三十八人。沖縄県は五十四人で統計を取り始めてから
連続三十四年間日本一を維持している。奄美大島は八十一人で沖縄県
をも大きく上回っている。与論の百歳以上は十一人で十万人あたりは
なんと百九十三人のダントツである。男女二人とも県一の長寿ととも
に、大いに誇るべきことである。与論はこの長寿の島を「ウリ」に全
国に発信し、大いに健康、長寿の町をアピールすべきである。遠慮は
いらぬ、こういうところが「打ちじゃしよりじゃしより」である。

健康長寿の島、与論島！！

百歳万歳！ 野沢マゴ万歳！ 嶺島峰永万歳！

長寿与論島万歳！ 万々歳！！

長寿の心得

人の世は山坂多い旅の道、命の齢にお迎えが来たら

還暦 六十才 とんでもないと追いつ返せ

古稀 七十才 まだまだ早いと突っ放せ

喜寿 七十七才 そう急ぐな老楽これからよ

傘寿 八十才 なんのなんのまだまだ役に立つ

米寿 八十八才 もう少しお米を食べてから

卒寿 九十才 としに卒業はないはずだ

白寿 九十九才 百のお祝いが済むまでは

茶寿 百八才 まだまだお茶が飲み足らぬ

皇寿 百十一才 そろそろゆずろうか日本一

きはながく こころはまるく はらたてず くちつつしめば いのちながらえる

氣心腹口命

達者で 長生きしなはれや

一、年をとつたら出しゃばらず 憎まれ口に泣きごとに
人のかげぐち愚痴言わず 他人のことはほめなはれ
知つてゐることも知らんふり いつでもアホでいるこつちや
ぼけたらあかん ぼけたらあかん
長生きしなはれや

二、勝つたらあかん負けなはれ いずれお世話になる身なら
若いもんには花持たせ 一歩さがつてゆずりなさい
いつも感謝を忘れずに どんな時にもおおきにと
ぼけたらあかん ぼけたらあかん
長生きしなはれや

三、なんぼゼニカネあつても 死んだら持つて行けまへん
あの人ほんまにいい人や そんなに人から言われるよう

生きてるうちにばらまいて

山ほど徳を積みなはれ

ぼけたらあかん

ぼけたらあかん

長生きしなはれや

四、

そやけどそれは表向き

死ぬまでゼニを離さずに

人にケチやと言われても

お金があるから大事にし

みんなベンチャラいうてくれる

内緒やけどほんまだっせ

ぼけたらあかん

ぼけたらあかん

長生きしなはれや

五、

わが子に孫に世間さま

どなたからでも慕われる

ええ年寄りになりなはれ

頭の洗濯生きがいに

何か一つの趣味持つて

せいぜい長生きしなはれや

ぼけたらあかん

ぼけたらあかん

長生きしなはれや

氣心腹己人

氣は長く、心は丸く、腹は立てず、己小さく、人大きく、と読む。遊び心旺盛な御仁が、生き方哲学を漢字模様で表現したものである。

氣は敢えて旧字を書いた。氣は、米とたちのぼる蒸氣の气（キ）を組み合わせて、米を蒸すときに立つ湯氣の意である。氣は氣のもと俗字だったが、今は正字になった。气の中にあるメは、締め切る意味があつて立ちのぼる湯氣にはふさわしくない。米は四方八方に發展する形をしている。しかも靈力を宿していると言われ、塩と同じく清めに使われる。簡略化して字の本来の意味をなくして残念である。

氣の一本を長く伸ばし、心の字は丸く書き、腹は寝かせて立てないことを表し、己の字を小さく、人の字は大きくして己は慎み、人を立てることを表現している。思わず感心させられる。

古来日本民族の精神構造の中に他人の不幸をあわれむ惻隱の情がある。平家物語の中に、熊谷直実が敵の平家の武將を組み伏して殺そうと思つて顔を見るとまだ若い。十五歳の平敦盛だった。熊谷直実は、こんな少年を殺していいものかどうか迷つてしまう。少年とはいえ、平敦盛は武士、首を討て」と直実に命じる。直実は仕方なく首を討つ。その後、手にかけてしまった敦盛を悼んで、直実は出家した。命乞いをせず、名を惜しみ、堂々と敦盛少年は討たれた。この物語が受けているのは、日本人の心の中に今もなお惻隱の情が流れていて、心揺さぶられるからである。

それがである。

国際化、グローバル化に対応するためにディベート（討論）力を養成するために訓練やゲームに取り入れられている。理屈をもって相手を打ち負かすことを良しとする風潮の世の中になってきた。国会の予算委員会は、予算案について審議するものだろうと思つたら、全然違うことが討議されていた。近くは永田民主党議員が、武部幹事長の次男に関するメールを持ち出し、非難中傷した。「人を呪わば穴二つ」、

あげく一つの穴には自分が、もう一つに前原代表が入った。

人間には他人の心を推しはかる能力がある。己を小さくして人を大きく立てると、他人も同じように自分を大きくしてくれる。鏡で自分の顔を見ると、自分の心を人の心に映して見ることが出来る。人の心もまた自分の心に映って見える。

とはいふものの、ドウダンミン男の日常は、これと全く逆になりがちである。気は短く、心はとげとげ、己は大きく、人小さくである。この作者、私に対し人生修行の目標にしなさいと。人間何事も努力。心に刻もうと、本版に大きく刻んで見上げています。

ともあれ、この文言の作者は、これが生き方流儀になっているのだろうか。であれば、爪の垢を煎じて飲みたいものである。

平成十八年四月記

命

今年（平成十八年）の世相を表す漢字は「命」。

秋篠宮家の長男悠仁（ひさひと）様誕生で生まれた「命」に注目が集まる一方、いじめ自殺や虐待、飲酒運転事故など痛ましい事件があいつぎ、一つしかない命の尊さが重視されたと思われる。

二位は、「祐仁様にちなみ「悠」、三位が「生」、あと北朝鮮の核実験で命の危険を感じた「核」、以下「子」「殺」「心」と続いた。

「命」の字の最後の線は、毛筆では伸ばすのだが、清水寺の森清範貫主が揮毫した表題文字は、最後止まり曲がっている。世相を表したものである。

また、今年の世相を反映した「新語・流行語大賞」にトリノ五輪金メダリスト荒川静香さんの「イナバウアー」と、藤原正彦さんの「国

家の品格」から取った「品格」が選ばれた。歌手倖田来未さんの「エロカッコイイ」、プロ野球日本ハムのヒルマン監督の「シンジラレナイ」のほか「格差社会」Bixi（ミクシイ）「メタポリックシンδροーム」がトップテンに入った。これらのうち「エロカッコイイ」「たらこ・たらこ・たらこ」「ミクシイ」は何のことやらトウラにはさっぱり分からなかった。トップテンのうち三つも分からないとは、それこそ「シンジラレナイ」だった。

メタポリックシンδροームは、ワタブタトウラのことだとずしりと腹に応えた。

今年の十大ニュースは次記の通りである。

〔国内〕①堀江前社長、村上前代表を逮捕。②安倍政権発足。③日銀が量的緩和解除、ゼロ金利解除。④3知事が汚職・談合で逮捕。⑤紀子様男児出産。⑥いじめ自殺、各地で続発。⑦秋田で子どもの連続殺人事件。⑧荒川、トリノ五輪で金メダル。⑨小泉首相、終戦記念日に靖国参拝。⑩日本の人口、減少局面に。

〔海外〕①北朝鮮が核実験、ミサイルも発射。②米中間選挙で民主党大

勝。③イラクでテロ激化。④原油価格、一時1バレル1178ドル台。
⑤ジャワ島で地震、使者5700人。⑥冥王星、太陽系惑星から降格。
⑦中国経済が高成長、外貨準備高は世界一に。⑧米国防長官更迭、イ
ラク政策見直しへ。⑨イスラエル軍、レバノン南部に侵攻。⑩イラン
核問題、安保理に付託で緊張高まる。

ドウダンミン男の順位は、①紀子さま男児出産。②いじめ自殺、福
岡など各地で続発。③秋田で子ども連続殺人事件。

今年は学校の校長先生が自殺するなど命がないがしろにされた。年
間の自殺者が三万人を超えることが十三年も連続し、しかもその数は、
増える傾向にある。命の「かけがえなさ」が音を立てて崩れていく感
がある。与論民謡に「まずは一番命があつて、命があつてこそ何事
も・・・」と歌われている。迎える新年は「命一番」であらしま
すように！！

平成十八年十二月暮れ記

イシヤイラズ

「健康のためなら死んでもいい」という、健康志向の過熱ぶりを笑った言葉に出合った。思わずトウラも笑ってしまったが、笑い終わって待てよと考えた。「健康でなかったら死んでもいい」と言ったら、どうなんだろうか。笑うどころか賛同する人が多いのではないか。長いこと病気でうめき苦しんでいる人が死んだとき、近親者がその人に対し「良かったね、楽になって」と呼びかけるのをきいたことがある。

トウラの父は、九十二才で老衰死だった。体のどこかが悪いということではなく、寿命が尽きるとはこのことかと思われた。母の晩年の生き甲斐は、その父を立派に旅立たせることだと言っていたし、その通りした。母は、九十八才で死亡診断は心不全だったが、私にいわせると老衰死だった。両方とも病院のベッドで苦痛にもたえることなく、自分の家で、やすらかな自然死を迎えた。願ったりかなったりの最期だった（親を自慢するバカ息子といわれるのは承知の助である）。それというのも、古川誠二先生の訪問診療のお陰様である。先生は

定期的に巡回して、氣さくに診てくださる。本當に有り難く、チジヌウイナンハミティヲウガム（頭の上に載せて拝む）氣持である。

日本は全国的に医者不足である。特に離島僻地は深刻である。産婦人科、小児科医の不足が叫ばれている。医者の絶対数不足は昔からであるし、将来にわたっても続くであろう。それなのに国は医者を増やす対策をとろうとしない。どうしてなのかドウダンミン男には分からない。医学部の希望者は多い。大学や定員を増やせばいい。簡単な方程式である。国民の要望に応えるのが政治。国民の福祉のためにあるのが政治。福祉とは、生命の危急を救い、繁榮させること。総理！総理！分かったか総理！（ああ！いっぺん言うて見たかった。）

「腹八分医者いらず」。医者には嫌われる言葉である。アロエの名前は、「イシヤイラズ」だと思つかり思つていたら、医者いらずほど薬効があることのようなのである。（パンチカシヨウ）。昔「猫いらず」というネズミ薬があつた。近頃の猫は鼠を捕らなくなつたからか、その薬はない。

「腹八分・・・」は、健康の秘訣だと思ひこんでいたら、五木寛之の

本によるとそれは三十代のことであつて、年代によつて違ふという。十代は腹十分、二十代は腹九分、三十代は腹八分、四十代は腹七分、五十代は腹六分、六十代は腹五分、七十代は腹四分、八十代は腹三分、九十代は腹二分、百歳以上は腹一分、あとは霞を食つて生きるべし。

ドウダンミン男は七十代というのに、いつもたらふく腹十分。五木という七十代腹四分の二倍半。太鼓腹を抱えて歩いてゐる。腹は満ちても口が満たないときさえある。これじゃ体にいいわきやないよ、わかあつちやいるけど止められない。スイスイスーダララッタスラッタスイスイ。スリスリスイスイ、スイスイスーダララッタスラッタスイスイ。

病院が栄え、医者もてる社会は病んでゐる。がたがた言うことない、な―んたつて、イシャイラズなあなたと私でありたい。

平成十八年食欲の秋

従心

トウラは、古稀（七十才）を迎えた。よくも馬齢を重ねてきたものである。

高井高盛先生から「老いてなお世事に抗う耳目かな」の自作俳句をいただいた。全く同感である。

十一月、十二月の二ヶ月間で、福島、和歌山、宮崎の三県の知事が公共工事入札談合で逮捕される。小中高生がいじめられて自殺する。その校長が自殺する。母親と内縁の夫が実の幼児を虐待、殺害する。日本国が北朝鮮、韓国、中国に馬鹿にされるわ。

こちトウラは「世事に腹立つ老人かな」だすわ。

孔子は、人生を振り返り、次のように言っている。

○十有五にして学に志す。↓志学

私は、十五歳のとき、真の聖人の学問を習得する志を立てた。

○三十にして立つ。↓而立（じりつ）

私は、三十歳になったとき、精神的にも経済的にも礼に立脚して独立す

ることが出来た。

○四十にして惑わず↓不惑

四十歳は活動時代で、普通にはむしろ惑いの多い時代だが、私は自分の人生の問題に惑いがなくなった。

○五十にして天命を知る↓知命

人間の遭遇する吉凶禍福―それが避けがたいものだと言うことを、私は悟った。同時に私は、この世を救う使命を天から与えられたことを自覚した。

○六十にして耳順（みみしたが）う。↓耳順

六十歳になって、経験も多くなった私の耳は、何を聞いても、不思議とは感ぜず、抵抗感も驚きもなくなった。世の中のことが分かってきた。

○七十にして、心の欲する所に従えども、矩をこえず。↓従心

七十歳となってからは、自分の欲するままに言動しても、決して軌道を外れることはなくなった。

孔子様とドウダンミン男と比べようなどと大それたことをしようとは思わないが、七十歳になったら心の赴くままに振る舞って踏み外す

ことはないとは恐れ入る。酒ガマ飲んで記憶喪失、「もう酒は飲まない」と何回公言したやら！

夕方になつて誘いがかかると、またいそいそである。七十にもなると今朝言つたことなどすっかり吹き飛んでどこ吹く風。忘れることは幸福への道である。

六十歳は耳順。何を聞いても驚かず、世の中のことが分かつてきたという。県知事様もただの人。金銭欲もあり、税金をかすめ取り、嘘もつく。なるほど。母親を親や人と思うからで、親も人も元をただせば動物じゃないか、動物は弱肉強食、不思議はない。中国や韓国から「お前らさんざん悪いことしたじゃないか」と言われ、「はい、おつしやる通りです」と頭下がりやなにごともない。

いやーそうなんですかね、孔子様、孔子様の時代も同じようなことがあつたんですかね？？いくらお偉い孔子様のおつしやることとはいえ、こちトウラはそうは思えません。耳順なんてとんでもない。逆耳どころか、とさかにくる。はいさっさー、ふいさっさー。

平成十八年十二月記

綻び・繕い（ほころび・つくろい）

祖母が針に糸を通そうとしているが、右にずれたり左にずれたりなかなか通らない。端で見えておかしくなる。「ミームドウルチナラジ、又チクリリ（目がもどろき通せない、通してくれ）」と頼まれ通してあげた遠い子どもの頃がある。祖母や母はよく着物のほころびを繕っていた。ミシンなどはなく、全部手縫いだった。裁縫は女の子の身につけるべき技術の一つだった。

その頃は何でも修繕をして使う時代だった。鍋に穴が空くと旅回りでふさぐ職人が廻って来るときに修繕をさせた。それを「ナービヌク」と言った。あるときそのナービヌクシャーが廻ってきた。祖母はナービナクをさせながらご飯を準備した。米のめしを山盛りしてあげた。その人がショウキラゴレ（息もつかずに食べることを）をしたことを覚えていいる。よほど腹が減っていたのであるうし、めったにありついていないご馳走だったに違いない。当時の与論に食堂があるわけではないし、店にも食べられるものは売っていない。山盛りの米の

飯など食べたことないトウラはうらやましく眺めていた。食い物にまつわる思い出はなぜか強く印象に残っている。こうもり傘の修繕屋も廻っていた。今どき、サッシ、網戸の修繕車の巡回放送を聞くと「ナビヌクー」を思い出す。

戦後飛躍的に普及したものに電化製品がある。ラジオからテレビ、洗濯機、冷蔵庫、パソコン、携帯電話。昔のラジオは真空管だった。それから半導体に替わった。故障すると真空管や部品を取り替えて修理が出来た。今は集積回路に替わり、一部分を取り替えることが出来なくなり、新品を買わされることになった。修繕して大事に使う思想も捨てられていく。

自分の内縁の夫に腎臓を移植させるために、二百万円貸している相手の腎臓を、借金を棒引きした上に、さらに三百万円あげるという約束で、移植手術させた。その後約束の三百万円がもらえなかったというところで提供した側が訴え出て事件が明るみに出た。臓器移植が可能になった時点で、この種の事件が起こり得ることは予想できた。噂によると開発途上国の貧しい人の臓器が売買云々??人間の心臓、肝臓、

腎臓などの臓器がまるで部品であるという思想に変わりつつあるのではないか。

人間の命とは何か？神が予想をもしなかった域を人間が超えようとしている。神様が「ハンガディアラチャマーダンタン、ワナーサンドウーへこんなことになるうとは思わなかった、わしゃ知らんぞー」と嘆き悲しんでいるに違いない。

物を大切にしないことから命をも大切にしなくなった。人と人のつながり、絆、親子の絆にほころびが出来、それを繕ってこなかったからだろうか。人倫の道の綻び（ほころび）の繕いが何より大事になってきた。

世の中の目がムドウルキ、人倫の針の穴に絆の糸が通せないありさまである。はあ！キツチャメー！

平成十八年九月記

プリナプ

「ねえ『プリナプ』したの？」「勿論よ。あたしが必死に働いて貯めた財産を、相手に横取りされるなんて嫌いだわ」。キャリア思考の女性が多いニューヨークでの話題である。

プリナプとは「プリナプティアル・アグリーメント」（婚前同意）の略。「離婚時、慰謝料は誰がいくら払うか」「財産はどう分けるか」「子どもの親権、養育費は・・・」「結婚前に離婚の条件を話し合い、新婦が取り交わす契約のことだ。紳士淑女の諸君、どう思いますか。決してプリムヌ（与論語のアホ）の間違いじゃございませんよ。

「親子一世、夫婦は二世」。佛教では過去、現在、未来を「三世」という。親子の関係は現世限り（一世）だが、夫婦の関係は来世（二世）までつながるといふわけだ。夫婦になるとは「二世を契る」、「あの世まで一緒」ということである。

あなた百まで、わしや九十九まで、ともに白髪の生えるまで。
結婚したら何があっても、死が二人を分かち合うまで添い遂げなけ

ればならない。離婚は罪惡であると刷り込まれているドウダンミン男には、この新聞記事を読んだとき、「なーんじゃこりゃ！」である。アメリカでのこととはいえ、やがては日本でもと思うと・・・。

初婚の米国人の二人に一人が離婚する現状と、何でも契約という社会にあつては考えられなくてもない。その場になつてから訴訟沙汰のトラブルを避けるためには良策である。それにしても結婚前に離婚同意とは味も素っ気もない。

羽田空港離婚が増えているとか。新婚旅行の帰り、降り立った羽田で「はいさようなら」である。その昔、情け容赦なく、損得だけで割り切ることを「ドライ」だといい、流行語になつたが、今時のこれは「超」ドライと言えбайいだろうか。

戦後民主主義、憲法、民法になり、二十歳過ぎれば本人達の意味だけで結婚できる。戦後六十年、個人の自由・権利意識が結婚観にも浸透してきた。

夫婦別姓を名乗る。生まれた子どもはどちらの姓にするのだろうか。戸籍には長男、次男、三男、長女、次女という記載ではなく、すべて

「子」である。財産相続権も平等で、親は生きているうちにちゃんと登記しておかないと争いの元まで相続させることになる。

戦前の結婚は親の同意が重要な要素で、同意が得られないとき、「駆け落ち」ということがあった。○○家と○○家の結婚式といわれるように、親族同士の新しい縁結びで、一族を巻き込む一大祝事である。縁起を担ぎ、しきたりがある。

花嫁が実家を出るときは、死者を送り出す縁側から出て行く。これは二度と戻ってこないという意味がある。花婿の家に入るときは玄関からではなく、台所から入る。客人としてではなく、家内人として入るという意味があり、ともに嫁入りの覚悟である。

祝宴で忌み言葉とされるのは、「切る、去る、戻る、返す、帰る、割れる、終わる、別れる、破れる、出る」、「度々、またまた、重ね重ね、くれぐれも、わざわざ、しばしば」などである。

紅白の水引は、結びきり。良縁は結びきり。結びきりをもって良縁と申すものなり。

平成十九年一月大安

「放す」と「話す」

昔々の物語である。

アジニツチエーは、大峰山と石積みパンタの間に縄を張り、それに芭蕉の葉をつり下げて兵士に見せかけて、東海を通る船から矢を射掛けさせ、それを集めて使っていた。その矢で東海を通る船の帆綱を射切って航行不能にした。それ以来船は与論島の西側を通るようになったという逸話がある。

柳沢厚生労働大臣が、少子化問題の講演の中で、「女性は子どもを産む機械だ」と言った。これは大臣でなくても、いや！大臣であればこそ非常識きわまりない失言である。子どもが生まれてくるのは、機械と反対の「神域」だからである。大臣は決してそんなつもりではなかったといつても、もう後の祭りである。言い放った言葉を再び飲み込むことはできない。弦を離れた矢と同じである。「放す」||「話す」。

加えて、揚げ足を取ろう、蹴落とそう、傷があればそこへ塩・唐辛子

を突つ込んでやろうと虎視眈々の政治の世界である。あわれ安倍総理大臣までもが平謝りのお粗末である。

某新聞のジョーク欄に次のようにでていた。

女は子を産む機械

男は働く機械

政治家は嘘つく機械

アタトゥン、アタトゥン。

柳沢大臣が言い放った「女は子を産む機械」の矢は、何千、何万本にもなつて飛んできた。アジニツチェの逆が思われた。与論の諺に「ティビヤーシ ウスイタランヌ クチン トウラリテイ（手のひらで覆うに足りぬほどの口に捕られて）」とある。

人の口が放つ・話す言葉には、「千万ギンシンホーランヌ ナーフト

ウバ（千万金でも買えないただの言葉）のように、値千金のものもあれば、人を殺すただの言葉もある。話すは放すはなす

与論の先人は、寝ている間以外は食べるために働きどうしの生活の中で、無学にもかかわらず人生の哲理を究め、諺や民謡として語り継ぎ、生きる糧としてきている。その内容は、過酷な自然条件、苦難な生活の中にあっても、常にプラス思考で情愛に満ちたものである。特に教訓的なものが多いのには、島外の識者も驚き、高く評価している。

与論島は三本の黄金の柱で支えられて、地震、大波にびくともしいという島語りにある。また、五穀のたまる豊かな島と誇らしく歌う。これらの精神文化は島の宝である。しかし、語る言葉も語り継ぐ人も継がれる人も減りつつある。今年、平成十九年三月の砂糖きびは、二万トン割れで過去最低になった。人口減少の歯止めも利かず、五千八百人である。ヌガティボタンデー イチャシユラガー！！
「小判金ぬ錢や 宝金やえしが 吾子ぬあていからどう うりん宝」
島ぬ宝、話し継いで放すなよ、クワーマガビンチャー

平成十九年三月記

赤ちゃんポスト

平成十九年五月十日、熊本県の慈恵病院で「こののとりゆりかご」の名前で赤ちゃんポストが発足した。設置者は、あくまで最後の手段であることを強調している。

いい風に考えれば赤ちゃんの救世主となるが、悪い風に考えれば捨て子助長となる。

これは人倫の道に関わる根本的重大問題だと思えるが、テレビはほどの扱いをしていない。臓器移植を絡めて、脳死は人の死かという議論がだいぶなされた。生命に対する考え方の一つのターニングポイントでだいぶ議論があつた。欧米と日本では認識と制度で今も隔たりがある。西欧ではすでに設置している国もあるとか。

私の親友で子供に恵まれなくて、ある機関の斡旋で、生みの親の分らない（というより生みの親を明らかにしない条件で）赤ちゃんをもらって育てたのがある。今では孫もできて幸せ家族である。

しかし、世の中皮肉なものである。開設したその日の午後三時頃、

三歳の男の子が入れられたのである。三つ子の魂百まで、といわれるように、人間の脳は三歳までに九十八%ができあがるそうである。「父ちゃん」、「父ちゃん」と泣き叫びながら置き去りにされたことを思えば肝病む。設置反対者は、それ見たことかと。

新聞のうそっぱち欄に

親の脅し文句

昔―押入に閉じこめるぞ

今―赤ちゃんポストに入れるぞ

―親

わが子へ

赤ちゃんが生まれることに勝る喜び事はない。女の赤ちゃんは、やがて娘になり、メーラビ（雅な女）になる。結婚して妻になり、子が生まれて母になる。さらに孫ができるとばあちゃんになり姑となる。一家一族に赤ちゃん一人が誕生することによって、兄ちゃん、姉ちゃ

ん、おじさん、おばさんが誕生することになり、構成が変わる。

秋篠宮殿下家に平成十八年九月六日、親王が誕生し「悠仁」と命名された。四十一年ぶりの男児誕生とあって、日本国中が喜びに沸いた。

国会は、女性の皇位継承をめぐり、皇室典範改正が議論されていて、その議論に影響を及ぼす誕生でもあった。

「一個の命は地球より重い」といわれた。命のかけがえのなさが近年揺らいできた感がある。ゆりかごポストの設置の是非について、正直なところドウダンミン男の胸の振り子もゆりかごのように揺れた。命の重み、それに対する仕組みなどへの大きな一石である。



平成十九年五月記

高校野球は面白い

今年（平成十八年）の高校野球夏の甲子園、沖縄代表は八重山商工高校、鹿児島代表は鹿児島工業高校だった。夏の甲子園大会は、先ず県大会で優勝して出場権を得るのが大変である。八重山商工は、離島勢で初のその快挙を成し遂げた。しかも春の選抜に続いての出場である。ベスト8を掛けた戦いで惜敗したが、その実力は本物だった。この快挙をNHKが特別番組を組んで九月十五日に放映した。

沖縄が日本復帰する以前に出場したときは、国民の同情応援があった。負けて甲子園の土を袋に詰めて持ち帰って来る選手を、税関が待ち受けて没収してしまった。糸満の沖縄水産高校がベスト4まで勝ち進むようになってからは、同情どころか沖縄恐るべしになった。沖縄水産高校の裁監督は、茶花の裁原家の親戚で与論二世である。ということもあって、トウラはテレビ機軸で熱烈応援をした。沖縄尚学高校は準優勝をした。私立で沖縄切つての進学校でありながらの快挙である。しかも練習はきっちり二時間。集中力の勝利である。

二十一世紀枠で出場した宜野座高校も宜野座村の田舎の学校、部員十一名のさわやかプレイで甲子園をわかせた。

鹿児島からは、県立鹿児島工業高校で県立の甲子園出場は実に久々である。あれよあれよという間に勝ち進んだ。ベスト8を掛けた戦いで9回表主将岡野がホームランを放って決着を付けたのは圧巻だった。ベスト4を掛けた戦いで優勝した早稲田実業とあたり負けた。インタビューで監督は、「甲子園に来られただけでも・・・」と涙を落とし、顔をくちやくちやにして応えていた。高校生のさわやかさに加え、監督の偽らざる心の内を見て、こちらの胸も熱くなった。

優勝決定戦は、早稲田実業と三連覇を掛けた苫小牧高校とで争われた。昨年の優勝投手田中と斉藤投手の投げ合い。延長十五回戦でも決着がつかず再試合。早稲田リードで迎えた最後の最後は、齋藤が投げバスター田中で迎えた。これ以上の盛り上がりはない。齋藤の直球に田中の三振で幕。甲子園の高校野球、筋書きのないドラマである。準々決勝帝京対智弁和歌山十二対十二。延長十回、四死球押し出しさよなら負けの悲劇的幕切れもあった。あの投手、無念をバネに人生を歩ん

でもらいたいと祈る気持ちだった。

甲子園での全試合を一人で投げ抜いた優勝投手、齋藤佑樹君の記者会見が九月十一日放映された。内容は、プロではなく大学進学を選んだということ。理由は、現在の力ではプロでは通じない。勉強して人間的に大きくなり、体力も付けたい。それからプロになりたいということだった。全く同感賛成。高ぶったところもなく、極めて自然体。退席のとき、きちんと椅子を中に入れた。隣の大人のものも入れて出て行った。サムエル・ウルマンの「青春」という詩の一節に「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方をいう」とある。それを思い出し、「人間は年を重ねてできあがるのではなく、高校生でもできあがるものだ」と思った。この一言を言いたくてこの項を起こした。その翌日、もう一方の雄、田中君はプロ入りを希望すると発表された。二人の前途に栄光あれ！

ホームラン六十本（ダントツ新記録）も出て日本中をわかせた十八（発展）回大会だった。高校生万歳！

平成十八年九月記

青春

サムエル・ウルマン

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方をいう。薔薇の面差し、紅の唇、しなやかな肢体ではなく、たくましい意志、豊かな想像力、燃える情熱をさす。青春とは人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは怯懦を退ける勇氣、安易を振り捨てる冒險心を意味する。ときには、二十歳の青年よりも六十歳の人に青春がある。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。

歲月は皮膚にしわを増すが、情熱を失えば心はしぼむ。苦惱・恐怖・失望により氣力は地に這い、精神は芥になる。

六十歳であらうと十六歳であらうと人の胸には、驚異に魅かれる心、おさな児のような未知探求心、人生への興味の歓喜がある。君にも吾にも見えざる馭逋が心にある。人から神から美・希望・喜悅・勇氣・力の靈感を受ける限り君は若い。

靈感が絶え、精神が皮肉の雪におおわれ、悲嘆の氷に閉ざされるとき、二十歳であらうと人は老いる。頭を高く上げ希望の波をとらえる限り、八十歳であらうと人は青春にして已む。

年季奉公

松坂大輔投手が、二〇〇〇年十一月、ポステイングシステム（入札制度）によりアメリカ大リーグのレッドソックスに移籍した。落札額は六十億円で西武ライオンズに支払われる。続いて阪神の井川慶投手がニューヨークヤンキースに移籍した。こちらは三十億円という。二〇〇〇年のイチロー外野手（マリナーズ）は十四億円だった。本人達との契約金と年俸は別途契約である。日本でのプロ野球選手の契約金が一億円の大台に乗ったのは十数年前ではなかったかと思う。当時驚きだった。メディアも大騒ぎしていた。アメリカのプロボクシングへビー級チャンピオンファイトマネーが数億円と聞いたときは驚きを通り越したものだ。他にプロバスケットボール、西欧のサッカー選手などプロスポーツ選手の値段には庶民の金銭感覚にない額がある。トウラが子どもの頃、「糸満に売るぞ」、「護佐丸が来る」、「巡查が耳を切る」などと言って脅された。

「糸満に売る」とは、糸満漁業に年季奉公に出すことである。売られ

たら、泳げない子どもは船から突き落とされて無理矢理泳がされる、上がろうとして船縁に手を掛けるとヤフ（舟をこぐかい）で指を打ち切られるなどのひどい仕打ちがあるといううわさ話があった。羽の生えた作り話だったと思われる。仲間内でのいじめは実際あったようだが、それはどこの世界でもある話である。多くは希望して出稼ぎ兼技術習得に行ったようである。

東区の若松組は、アギヤー船団を組み九州、四国、さらには鳥取県沖の島々まで駆け回り、一代を築いた。今も屋久島漁業の重鎮である。

古里の市来秀安氏は、千葉県銚子沖で素潜りをした。そこで真冬一時間も素潜りできるのは私ぐらいのものだったと語っていた。当時はウエットスーツなどなく、褌（ふんどし）いっちょである。市来氏は古仁屋の大網元だった。最盛期は、有村治峯氏とどっちだろうといわれるほどだった。

また、縁あって糸満の人と結婚し、大成している人もいる。

護佐丸は、沖縄中部の英雄豪傑、座喜味城の城主で、とりわけ築城の名手といわれていた。築城の人夫は、与論をはじめ大島本島などが

らかり出した。そのため護佐丸の名は恐れとともに轟き、「泣く子も黙る護佐丸」だった。反面、男の赤ちゃんが元氣よく泣きわめくと「護佐丸だ！」と称えた。

巡査も怖いものだった。「引っ張って行って耳を切るよ」などと脅された。「お父さんに言いつけるよ」、「先生に言いつけるよ」というのも脅し文句だった。これらのたがははずれてしもうた。

公共工事や絵画の入札、魚や牛馬の入札はよく耳にして来た。スポーツ選手の入札とは！

昔、年季奉公

今、年期契約

昔、人身売買

今、競争入札

平成十八年十二月記

鏡

ある日、散髪屋の鏡の前にすわり、鏡を見ていたら、どうしたことか、気持ちが悪くなってきた。店主が顔色で見て取ったのか、「大丈夫ですか、鏡を見ると気分が悪くなる人がいるそうだが」と言つて、椅子を回して横向きにしてくれた。私の場合は、脳に穴があいているせいかもしれないと思われるが、どうしてなのか分からない。鏡の魔性のゆえだろうか。

「刀は武士の魂、鏡は女の魂」といわれる。嫁ぐ娘に、母親は鏡を与えた。

その昔、妻は夫より先に寝てはいけない、夫より後に起きてはいけない、夫に寝顔を見せてはいけない、といわれた。今時、電車の中で手鏡を見ながら口紅を塗り、化粧をしてはばからないうら若きがいる。昔を引きずっている男は目をそらしてしまう。

『天照大神はあるとき、冥界の統治者の凶暴な振る舞いに激怒して、「天の岩戸」に身を隠してしまい、世界中が真っ暗になった。困った

他の神々は、何とかして女神を誘い出そうと、踊ったり、かがり火を焚いたり、祝詞を奏したりしたが、効果がなかった。最後に、彼らは聖なる山から採った金属で鏡を作り、「一点の曇りもなく、言葉に表せないほど美しく、まるで堂々たるアマテラス様そのもののようです。どうか岩戸を開けて、これをご覧ください」と女神に呼びかけた。そして、女神が外をのぞき、鏡に映った自分の姿に見とれている隙に、神々は彼女をつかまえて岩屋から連れ出した。』（鏡の歴史 河出書房新社発行 43頁から）

このときの鏡が、三種の神器の八咫鏡（やたのかがみ）として伊勢神宮に祭られている。

トウラの神棚には金属製の丸い鏡をご神体として祀つてある。すなわち先祖の御霊の集合体である。同時に、丸い鏡は太陽のシンボルであり、天照大神を表す。

与論で改葬をする前の祝詞の中に「たまにして差し上げる」という文言がある。意味は、汚れを洗い落としてきれいにして差し上げる、と言うことだが、このときのタマは、「御霊（みたま）」の「霊（たま）」

に通じているのではないかと思われる。

鏡は古来、呪術的なものとして重視され、祭器や権威の象徴・財宝とされた。水晶球を利用した呪術は、昔から行われた。

童話「白雪姫」で、お后が正直に答える鏡を持っていた。その鏡にお后が、「鏡よ、鏡、世界で一番美しいのは誰か？」ときくと、「それは白雪姫です。」と答える。「世界で一番醜いのは？」ときいたら、その鏡は、なんと答えただろうか。

鏡の最たるものは、人である。

よきにつけ、悪しきにつけ、「人のふり見て、わがふり直せ」。

「親は子の鏡」。「子は親の鏡」。嫁にしたいときは、その母親を見よ。タンデー タンデー パンチカシヨウ。

老けて見える同級生に会うと、己が見えてうらがなくなる年頃になった。ナグリヤー

平成十九年二月記

世間は己の鏡

私の父・母は、「私の死後の祭りは絶対にしないように。子や孫、親戚に決して難儀をさせてはいけない」とのかねがねからの固い言いつけだった。あまりにも固い意思を感じ取っていたためにそれを守り、死後の一連の十日、二十日、三十日祭りなどはしなかった。

ある親戚の死後の祭りに出席した。すでに十数名が着席していた。戸主がいきなり私に対して、「ワヌカティ プサイハンシティ（私に負債を負わせて）」といわれた。まともに挨拶もしないうちから、これはまた異なことをおっしゃるものだ、と内心穏やかならざるものを感じながら、いつものように神棚に持参物を供え、礼拝をした。その日は、別の予定があつてすぐに退席しなければならなかったので、戸主及び列席者に、その旨の挨拶をして退出した。

戸主の「負債云々」は、私が父母の祭りをしなかったことへの不満である。親しさがあるゆえに、冗談、非難、感謝をごちや混ぜにした挨拶代わりであることは十分承知している。よくぞ言ってくれたと感

謝の念さえある。立場変われば私も同じ思いをするに違いない。

また、別の同様の席で、隣り合わせた人から、「ウレーヤシマジユウヌプターシチティカラ、ドウヌサシランガネー（あなたは人の為にはするものの、自分のことはしないで）」といわれた。これは、非難よりも「あなたの祭りに参加したかったのに」という好意を表したものだ。死者に対して「してあげたい」とすることが「負債」になる。トウラは、いろいろと反省させられた。以来、よほどのことがない限り行かないようにしている。人生勉強である。

あるところのお悔やみに行った。数日後にその喪主が、一年以上前に死んだ私の父に対し、香典を持ってこられた。トウラはびっくりした。その人は私のところには来なかったのに、私がその悔やみに行ったからあわててお返ししたわけである。お悔みにいくある人が、「借金払い」といった。またある人が「私は、あちらにはいったが、むこうはこなかった」といった。

与論の葬祭は「ユイタバー」といわれ、していただくことは記憶、記帳して、相手方に同じようなことがあるときにお返しする。そのお返

しは何年後になるかわからない。場合によつては子の代にも及ぶ。葬祭の記帳簿は貴重である。

与論の諺に「世間は己の鏡」とある。哲理だと感服する。

「果」には「因」がある。「負債を負わせて」といわせた「因」はトウラにある。人は鏡のように自分の心の姿を映し出してくれる。欠点も人から見た姿もそのまんま見せてくれる。

世間とは有難く、実にいいものである。

平成十九年三月記

花を花とみて花と見ず

禅語に「花を花とみて花と見ず」とある。水をやり、虫を捕り、支柱を立てて手塩に掛け、愛情を持って育てた花は、単なる花ではなく、最高にきれいな花であり、わが心の花である、ということになる。

花木を植え、花を育て、きれいな庭造りをしたある家庭に行くとその主人のかねてが見える。いついつても下駄箱の上に花をいけてあるところは、その家人の心が見える。

花いっぱいに行くと、誰がしているんですかときく。みんなで、というときには、中心になっている人は？と再度きいてしまう。若い頃つかえたある教頭先生は、花作りに熱心で長けていた。その先生が、「花作りは愛情ですよ」といわれた。意味が飲み込めずにいた。また、「花育ては心育てですよ。だから子供にもさせるのだ」とも言われた。花を育てた人は、人が育てた花を見て育てた人を見ている。

晩年の祖父は、プランターに花を植えて楽しんでた。手入れをしながら、幼稚園生の孫娘に「きれいだね、雅子」といった。成人した

孫娘は祖父の弔辞でそのことを印象深く述べていた。

惜福、分福、植福なる言葉がある。「植福」は、後に福をもたらすことをあらかじめ準備しておくことである。例えば、山に杉の木を植えておく。何十年か後に材木として子孫の為になる。植えたじいさんの為にはならない。桜の名所の並木の陰には、植福者がいる。吉川英治の句に「菊づくり、菊見るときは、かげの人」とある。吉川英治は小学校四年までしか出ていない。百科事典を繰り返し繰り返し五十回読んだという。豪華に飾られている菊を見ているのではなく作った人を見ている。さらには菊の美を作った神まで見ているのかもしれない。

葬式にいただいた酒を、三十三年忌の為に床下に穴を掘り、埋めてあった古酒をいただいたことがある。沖縄の居酒屋の主人が、千円で会員を募り、アルコール度の高い泡盛を買って、百年後に飲む古酒作りをしている記事を読んだ。応募してきた会員は、五十過ぎのおっさんたちである。飲んべーのロマンである。これ、シタイヒャー。

登山をしていた三人が遭難をして、救助を待たざるをえなくなった。疲労困憊（へい）、空腹の極である。おにぎりが一つ残っていた。それをどうするか。三等分する。一番弱っている人に上げる。強いのが一人じめする。あなたならどうするかときかれたら、ドウダンミン男はどうするだろうか。神様は、弱っている人に全部上げなさいというに違いない。極限の場合でなくても、日常の一般社会でも考えるべきことではないだろうか。勿論考えているだけ、言うだけでは意味をなさない、実行の上である。

教養とは、分かるようで分からない言葉である。ドウダンミンの知力を総結集して得たのが、教養とは、そのことの周りまで推し量る力である。どの程度まで推し量ることができるかが、教養の程度ということ。エッヘッヘー　ワカトウルプライ

平成十九年三月記

つもり違い

- 一、高いつもりで、低いのは、教養
- 二、低いつもりで、高いのは、気位
- 三、深いつもりで、浅いのは、知識
- 四、浅いつもりで、深いのは、欲の皮
- 五、厚いつもりで、薄いのは、人情
- 六、薄いつもりで、厚いのは、面の皮
- 七、強いつもりで、弱いのは、根性
- 八、弱いつもりで、強いのは、我
- 九、多いつもりで、少ないのは、分別
- 十、少ないつもりで、多いのは、無駄
- 十一、いつまでもないつもりで、あるのは、災難
- 十二、いつまでもあるつもりで、ないのは、金
- 十三、忘れないつもりで、忘れるのは、受けた恩
- 十四、忘れるつもりで、覚えているのは、掛けた情け
- 十五、酔ってないつもりが、酔っているのが酒くらい

ウラ・ワヌ・ユー・アイ

与論語で「ウラ」は「あなた」、「ワヌ」は「私」のことである。目上の人には「ウレー」という。目上が単なる年齢や社会的地位関係であれば簡単である。同級生に「ウレー」と言えば「ウラ」と言えと怒り気味に言う人がいる。親密度が遠のいた感じがするからであろう。同級生でも長いことご無沙汰の間柄では、いきなり「ウラ」ではやはりぶしつけな感じがする。

英語で「あなた」は、目上、目下関係なく全部「ユー」でいい。日本語では相手に対して何と呼びかけていいのか非常に迷い悩むことが多い。高校生以下なら「あなたは」「君は」で済む。全くの初対面なら「お宅は」「あなた様は」とそれほど抵抗なく言える。

自分というもののとらえ方が日本人と西欧人では違う。西欧では「私」イコール「あい（I）」。日本では「手前」は、自分であつたり、相手であつたりする。喧嘩のとき「てめえ、この野郎」と言えば相手のことである。ここから分かるのは、西欧の場合「私」は自己以

外何ものでもないが、日本の場合は自己であつたり相手であつたりである。己と相手を同一と見ていると言うことである。

与論語で「ドウ」というのは己の場合と相手をさす場合がある。「ドウナー」は、自分たちとあなた方を意味する場合があり、同じ言葉が両方に使われる。

日本では「公」と「私」の際の「私」はイコール「家」である。墓の作り方にその違いがある。何々家代々の墓を作り、個人と家が同一になつてゐる。西欧の場合は個人の墓になつてゐる。わざわざ何年に生まれて何年に死んだと個人のデータまで書いてある。

アメリカの鉄鋼王安ドリュ・カーネギーは、自分の墓碑銘に「己の周りに、己より優れし人物を集めたる者、ここに眠る」と刻ませてある。トウラの墓標は「ドウダンミン男ここに眠る」としようつと！

英語では、親子の間も「ユー」と「アイ」である。単純割り切りである。日本語は、この辺が曖昧模糊として難しい。第三者が、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんという呼びかけをする。あるテレビ番組で女性アナウンサーが「おばあさん」と呼びかけて「そん

な孫見たことがない」と返されて、目を白黒させているのがあった。第三者が家族と同一になっている。会社の社員でもない第三者が、「社長」という呼びかけをする。これも同一になっている。竹下石油のガソリンスタンドボーイをしているドウダンミン男に対し、「社長」と話しかけてくる。社員もいないのにと、男の胸はどぎまぎする。

家族的、同一、曖昧模糊、和などが日本古来の文化で、良さもあり欠点もある。難点の最大は、初対面の人に対し、相手をなんと呼んでいいのかということである。特に、肝玉の小さいトウラは戸惑い、もごもごする。

弟の妻が私と話しているときに自分の夫を「さん」付けで呼ぶ。注意をしたが癖になつていて直らない。娘の夫が妻の名を私に向かつて同じようにさん付けで呼んだ。同一視すべきところを他人扱いにしている。ドウダンミン男は頭の風化進行形であることを覚え、うら寂しくなる。

平成十八年八月記

国民性

納豆を朝晩、一日に二回食べればやせられると、フジテレビが放送したらスーパーやデパートの納豆はたちまち品切れ。実験データがねつ造だったとして社長が謝罪。やせると言えば飛びつく世相。食べてやせるのだからやせ願望族にとつては福音。確実にやせる方法は食べなければいい。食べなければ食費も要らない。一挙兩得。

さもなければ運動して燃やし尽くせばいい。食べたいだけ食べて動きたくない、その上やせたい。あんまりだわ、この罰当たりめ。

オイルショックのとき、トイレットペーパーの買い付け騒ぎでパニックがあつた。

韓国の某俳優が来るということで何千人といういいお年の大和撫子が押しかけ、きゃーきゃー騒ぎのテレビを見るにつけ、トウラは仙人にでもなりたくなる。

国民性を言い表したジョークがある。

ある豪華客船が航海の最中に沈みだした。船長は乗客たちに速やか

に船から脱出して海に飛び込むように、指示しなければならなかった。船長は、それぞれの外国人にこう言った。

アメリカ人には「飛び込めばあなたは英雄ですよ」

イギリス人には「飛び込めばあなたは紳士です」

ドイツ人には「飛び込むのがこの船の規則となっています」

イタリア人には「飛び込むと女性にもてますよ」

フランス人には「飛び込まないでください」

日本人には「みんな飛び込んでいますよ」

（世界の日本人ジョーク集より）

奄美の島民性を水間忠光氏はその著「奄美の風土と人と心」（233頁）で次のように述べている。

大島には往昔から次のような俚諺があり、広く人口に膾炙（かいしや）されていた。

（ものごとの交渉を進めることになぞらえて）

一番手には、喜界人士を立て、話の口開けをさせなさい。喜界の人

は話し上手で、ひとつきがよいから。

二番手には、順序として大島の人をやってみるがよい。誠実・実直すぎて、話は一向に進むどころか、膠着状態に陥らしてしまうのがいとこである。

三番手には、局面打開のために、徳之島人士の出番となし、拳骨を振り上げて脅しつけさせなさい。そうしたら気の弱い相手なら直ちに平伏し解決する。逆に気の強い相手ならば、なおこじらせてしまうことになる。

そこで四番手には、沖永良部の人の出番となして、話の決着いかに関わらず、後始末・整理をしてもらう。ということである。

ドウダンミン男が、あと一行加えて「しずしずと与論人が出てきて誠の心でまゝるく和やかにする」と。

平成十九年一月記

騎馬戦

与論高校の体育祭の入場行進は、腕は肩の高さまで上げ、ももも高く上げ、若者らしく元気があつて見ている者をさわやかにしてくれる。号令をかけながら行進するなどチームカラーを出す工夫もしている。「若い力」の斉唱は、天に届けとばかりに声を張り上げる。トウラが中学校に勤めていたときは、生徒に声を張り上げさせるためにこちらは叱咤の声を張り上げるものだったがと、ことさら感心した。

「国の未来を見なければ、その国の青年を見よ」といわれるように、体育祭の高校生の態度に与論島の未来を見る思いでホーラシクなる。

その昔、体育の時間や運動会で騎馬戦、棒倒しがあつた。騎馬戦は、二人一組、四人一組、大勢組の三通りの形式があつた。二人組は、騎手を肩車で担いで戦った。四人組は、大きくて力の強い者の左右両肩に二人が腕を組む。組んだ腕に騎手が足を入れて乗った。大勢組は四人組の周りについた。騎手が組み合い、組み伏して地面に落とすまでの激しい戦いだった。肉弾戦ではあつたが決して殴り合いはしなかつ

た。二人組のときは馬が強い者でなければもたなかった。四名組のときは、騎手は腕力があり意地の強い者が選ばれた。後年は騎手の帽子や鉢巻きを取り合う優しいものに変わった。

棒倒しは、長さ二、三呎の丸太ん棒か、がら棒（大きな竹の棒）を立て、それをみんなで倒されないように守るのである。攻める方は棒に飛びつき、必死に倒そうとする。棒の先を先に地面につかせた方が勝ちである。

男子の定番種目にマスゲームがあつた。一人の肩の上にもう一人が立って両腕を横に広げて入場した。大きい者が下で小さいのが上である。うまくいかないのは中間層である。同じ大きさ同士ということでもうまくいかない。トウラは中間層で、上になつたり馬になつたりだったが、運動神経も鈍くうまくいかなかった小学校五・六年生時代の苦い思い出がある。両手両膝についてピラミット型に人を乗せるのがあつた。膝は地面に食い込んで痛い、背中の上の人の膝が食い込んで痛い。顔を真っ赤にしてこらえた。

昭和四十年頃の中学校男子のマスゲームのハイライトは、マストだ

った。五名が肩を組んで輪になって坐る。その肩の上に三名が同じように肩を組み坐る。さらにその上に二人が肩を組んで乗る。またその上に一人が乗る。笛の合図で下から順に立ち上がる。観客も緊張のうちに見守る中を次々と立ち上がる。四段になるので完成時にはかなりの高さになる。最上段の生徒が両腕を広げて完成である。その後上方から笛の合図で順にしゃがんでいく。危険を伴う種目だけにいつのまにか消えてしまった。

中学校三年生にオクラホマミキサ―等の男女手をつないで踊るホークダンスをさせた。最初の頃、なかなか恥ずかしがって手をつなぐとせず、先生方は苦勞したものだだったが、後年には生徒の方から希望する種目になった。

今は昔の小・中学校の運動会種目の移ろいである。

平成十九年六月記

猿

名瀬市（現奄美市）の生徒数八百名を超える金久中学校がトウラの初任校だった。校長がある有力者から猿をもらい受けてきて、大切に飼うように命じられた。理科担当は5人いたが、その役は当然であるかのように大学出たてのトウラに当てられた。猿小屋が出来るまでということで、大きなシラギ（ヤブニツケイ）に長い鎖でつないでおいた。土曜日の午後、同僚の先生がよちよち歩きの子どもを学校に連れてきていた。それを若い女の先生が、猿を見せに連れてきた。すると、木の上にいた猿は興奮して歯をむき、ぎゃーと叫びながら子どもに襲いかかっていった。背中に馬乗りになりかみついた。あつという間の出来事だった。大けがではなかったのが幸いだった。

トウラは、早速理科主任の先生に連絡した。二度と同じことが起きたらいかんと二人で相談して、猿の歯をヤスリで削って平にすることにした。生徒が見ないうちにと理科室で、早速取りかかった。ところろが小さな猿とはいえ、暴れて思うようにいかない。麻酔のか

わりに酒を飲まして酔わせようと考えた。南洋の猿は、椰子の実で酒を造りそれを飲む。それを真似て人間は酒を造ったというから、これがほんとの猿まねである。名案だとばかりに焼酎を口に押し込んだ。しかし暴れが止まない。さては猿もさるもの、酒に強い。量を増やしていく。

酔った勢いか、ますます元気、もう一杯とつぎ込んでいった。

しばらくしたらどうしたとか、腹がふくれてきてぐったりしてきた。腹がばんばんに腫れて死んだようである。主任は豪放な人だったが心配の色は隠せなかった。というのは、校長が厳しさを恐れられていた上に、有力者からの大事な贈り物ときている。もう夜の十一時を回っているが、何とかならないものかと、箱に入れて二キロほど離れた獣医の家に自転車（当時車を持っている先生はいなかった）をこいで行き、起こしてみてもらった。玄関先で死の宣告。もう冷たくなっていた。校長になんとお詫びするか、主任の心配が空気を振るわして伝わってくる。

善後策として校長先生に「埋めて、白骨化したときに掘り出して、

骨格標本を作つて残しますのでお許しください」と二人最敬礼した。理科室の裏に囲いをつくり恭しく猿墓とした。

猿がなぜ幼児に敵愾心を持ち襲いかかるのか。

養老孟司の著書「超バカの壁」の中にその答えらしきものが書かれていた。それによると、人間は動物を見て怖いと思つたら「おまえ、あつち行け」という忌避物質（信号）を出すらしい。それを動物は敏感に嗅いで、なんだ勝手に近づいてきてと怒るらしい。動物を怖がる人がよく襲われるのはそのためだそうである。

「ミヤンコー ピチュヌクルミュン（猫は人の心を見る）」先人から聞かされたことである。猫が好きで猫かわいがりする人には猫が猫なで声ですり寄ってくる。猫嫌いな人には寄つてこない。「おまえ嫌いだ、あつち行け」という信号をいきなり出すからのようである。

たかがイキムシ、たかが猿、されど猿！！ 今をサルこと五十年前、サルとトウラのおかしくも笑えないサル物語りである。

平成十八年十月記

疑われたこと

書店で岩波文庫本を一冊買った。カバーを付けましようかというのを断つてそのまま手に持つて出た。友が次の書店に行こうと言ったのでついていった。店内を見て回つて出たところ、店の親父に呼び止められた。「その本はどうした？」と怒った顔で言われた。トウラには意味が飲み込めずにいた。トウラの手から本をとろうとしたので、やつと分かった。買った店の名前を言つた。店の親父は「ちよつと来い」と中に呼び込んだ。友は黙つて立つていた。親父は私を買つたと言つた店に電話をした。買ったのを確かめたあと、一方的に私が悪いとばかりに怒られた。昭和二十九年、高校生のときだった。それ以来、トウラはその書店には行つたことがない。

中学校の教頭をしていたとき、名瀬の店から「お宅の生徒が万引きをしたので引き取りに来い」と電話が来た。あわてて一時間近く車を飛ばして行つた。生徒のそばに立ち、くそみそにトウラは叱られた。人間をしているみじめさを味わつた。初めて「万引き」を知つた。昭

和六十年のことである。

昭和三十三年、大学の休みに旅行気分もあつて熊本の叔母のところに行くことを思い立った。叔母の夫は警察に勤めているから、家は警察に聞けば簡単に分かるところだと思つた。道順を聞きに、熊本駅前交番に入つた。予想とは違つて、「どんな関係か。そのフルネームを書け。その家族構成は？何の目的で？などなど」根掘り葉掘り訊かれるばかりで一向に教えようとしなない。じれったくは思ひながら、うぶなトウラは丁寧な答えた。後年、俺は疑われていたんだということを思つた。

出勤前に与論漁協のせり場に寄つてせり魚を見るのは楽しみである。ある朝、その近くで警察官三人が何かを調べていた。そばにいつて「何かあつたんですか」と声をかけた。すると私の方が何かときかれだした。沖永良部からきたらしく見知らぬ警官だった。疑われていると後悔した。事件現場に近づくものではないとタマシが入つた。「君子危うきに近寄らず」である。

小学校の女の子が事件に巻き込まれた疑いがあり、警察が調べていると、校長から教育長である私に連絡があつた。早速、警察署に状況

を聞きにいった。すると開口一番「どうして知ったか」と逆に訊かれた。その目は、犯人疑いで慄然（りつぜん）となった。

近頃読んだ本で、重大事件の捜査で、警察官2000人をリストアップして調べたことが書かれていた。警察が警察を疑う。近頃の警察官の犯罪報道を聞くにつけ、さもありなんと、妙に納得気味である。教育長であろうが疑われて何の不思議もない。自分が相手にどう写っているのか、分かっていない能天気ぶりなことごとである。

お口直し話。名瀬でふすま一つのしきりで、一年先輩の名瀬中学校の先生と二人で下宿していた。私の隣は、下宿主のおばさんの部屋である。ある日隣の先生の部屋に泥棒が入りお金が取られた。刑事がきて調べたという。刑事が帰り際に「隣の先生（私のこと）に事情を聞く」と言つたという。おばさんは、「隣の先生では絶対ないのでしないでくれ」と強く言つたという。事情聴取されることを覚悟していたが何もなかった。その刑事は与論出身と後で聞いた。おばさんと刑事から信頼されたんだと心がぬくもつた。

平成十九年四月記

親ヌプリムヌ（親馬鹿）

与論の諺に「ワークワードウミームヌ（我が子こそ見もの）」というのがある。学芸会、運動会、相撲大会などお目当てはいつも誰でも自分の子である。

ある先生方の会合で、「世界で一番美しい娘は、一人しかいないが、その母親は、十億人いる」と言ったら、意味が分かりかねるというのがいた。つまり母親にとつては自分の娘が世界で一番美しいのである。親は皆自分の子をそう思っているから、先生方はそのつもりでいなければならぬ、とお説教を垂れたのである。

抱かれている赤ちゃんを「かわいい」、「プシャギヤー」などと褒めると、母親は満面に笑みを浮かべて至福に浸っている。産むまでの苦労への報酬であろう。

息子の作文が入選し、表彰状がきた。親馬鹿なトウラは早速額に入れて掲げた。次はその作文である。

命のバトン

与論中学校二年 竹下徳正

今年で祖母は八十八歳、米寿を迎えます。父がそのお祝いをしようと祖母に相談をしたら祖母は、こう言いました。「いや、まだじいさんが墓の下に眠っているのに、自分だけ、お祝いをする気にはなれない。」

与論では、人が亡くなったら土葬にします。そして三年たったら、また掘り起こして骨をきれいに洗って骨を壺に入れるのです。まだ祖父が亡くなって二年目になるのです。そのため人を招く大きなお祝いは取りやめになり、親族だけのささやかなものとなりました。

そうして、平成八年、八月八日。八が三つ重なる吉日が選ばれ、昼間の暑さも和らいだ頃、祖母のお祝いが始まりました。

八十八歳になると、「とうかき」といわれるそうです。その由来を祖母が、説明してくれました。

昔は、納税のときや米をはかるときに一升ますを使ったそうです。「一升」を「一生」とかけて、「人生のますが満杯になったから、もう

これでお祝いは最後ですよ。終わりですよ。」という意味があるのだそうです。それで「あなたは人生をまつとうした。」ということ。「とうかき」をあげるそうです。

「とうかきというのは、そんな意味もあつたのだなあ。」と昔の人の考え方に感心しました。一ついいことを学びました。

お祝いの会順も進んでいき、みんなで和やかに食事をしているとき、父の「話すのをやめてください」という一言で、みんな箸を置き、祖母に注目しました。

「私は今まで、子や孫、多くの人たちに生かされてきました。どうもありがとうございます。私からはこの言葉をみんなに贈ります。みんな一斉に呼んでください。」

「しろがねもくろがねも玉も何せむにまされる宝子にしかめやも」

「子に勝る宝はない」という意味です。一斉に拍手喝采でした。すると父が、「それじゃ私たちは、ばあちゃんにあれをみんなで読もう。せいの。」

「十億の人に十億の母あれどわが母に勝る母あらめやも」

再び拍手喝采です。父の気の利いた一言でした。

次に父が一人ひとりに杯をまわしながら、年の順に祖母へのお祝いの言葉を言わせました。中でもおじの言葉は、ユーモアをおりまぜながら思い出をなつかしく語り、途中、涙をさそう場もありましたが、和気あいあいとした雰囲気を作ってくれました。

最後に父が、祖母のために、今日のために、毎晩遅くまで起きて作った長い長い家系図を説明してくれました。この長い長い家系図にも、僕の名前が、しつかりと刻まれていました。「僕は、こんな長い長い家系図の一つの命を受け継いでいるんだ。家系図を途切らせないためにも、次の時代にしつかり受け継がないといけない。」という責任感を感じました。

父と母で二人

父と母の両親で四人

そのまた両親で八人

過去無量の

いのちのバトンを

受けついで

いま、ここに

自分の番を生きている

それがあなたのいのちです

それがわたしのいのちです

（相田みつを「いのちのバトン」より抜粋）

僕が命のバトンを託す様子をいつまでも祖母に見ていてほしいです。

ぬけぬけと自分の息子を自慢する様は、親のプリムヌという形容が
びったしかんかんである。ドウダンミン男の超親馬鹿ぶりをお笑いく
ださい。

平成十九年四月記

風

竹下 徹

風は誰も見たことがない

風は誰も聞いたことがある

風は誰もとらえたことがない

風は誰もはだで感じている

風は吹いたり止んだり気ままである

風は雲、雨、雪をさそつてくる

風は匂い、塵芥、季節をつれてくる

風は波を立て、草木をゆらし、花を散らして去る

風は国に、家に、人の周りによどむ

風は家の中によどんで 家風となる

風は島の中によどんで 島風となる

風は人にまわれ人となりとなる

風は見えないが風圧がある

風は見えないが風速がある

風は見えないが風向がある

風は見えないが風力がある

風はあるが見えない

誠一筋

竹下 徹

誠一筋

これぞ与論島の胸飾り
重なる台風・旱魃・災害
いにしえよりみな耐えて
心寄せ合い分け合うて
いやさかえし与論島
島をい出た民も居る民も
その生き魂

誠一筋

参考著書

与論町誌

与論方言辞典

菊千代・高橋俊三著

与論島の民俗

栄喜久元著

与論島の民謡と民俗

川村俊英著

古代黒潮文化

川村俊英著

与論島民話集

町田原長著

南島与論島の文化

野口才蔵編著

奄美の風土と人と心

水間忠光著

奄美人物名鑑

アド・タイムス 奄美

大奄美紳士録

奄美社

平成19年12月発行